四国新聞　2025年(令和7年) 6月1日(日曜日)

香川の医療最前線 721

早期治療で悪化阻止を

ITB、広範囲に効果的

「痙縮」

四国こどもとおとなの医療センター
脳神経外科医長　大北真哉氏

◆おおきた・しんや　2003年徳島大医学部卒。鳴門病院、香川小児病院（現四国こどもとおとなの医療センター）、徳島大脳神経外科、高松市民病院（現高松市立みんなの病院）などを経て、21年4月から現職。日本脳神経外科学会専門医・指導医、ITB療法施行資格医、日本DMATインストラクター。徳島県出身。47歳。

脳卒中の後遺症の一つでもある「痙縮（けいしゅく）」。意思とは関係なく筋肉が緊張し、関節が曲がったままになったり、手足が勝手に突っ張ったりする症状だ。その結果、着替えや入浴、歩行などに支障をきたし、痛みも伴う。放置するとさらなる悪化を招くこともある。リハビリテーションや各種治療に当たっている四国こどもとおとなの医療センター脳神経外科医長の大北真哉氏に、具体的な治療法などを聞いた。

―痙縮とは。

脳卒中をはじめ、脳性まひ、頭部外傷、脊髄損傷などの影響で、脳や脊髄が損傷し、筋肉の緊張を調整する神経系機能がうまく働かなくなる疾患だ。脳卒中の場合、発症した人のうち約4割が痙縮になるというデータもある。子どもでも脳性まひの影響で発症するが、脳卒中などが増えていく年代になるほど多く発症する傾向にある。

―患者数はどのくらいいるのか。

70万人程度と言われているが、がん患者数などと違って、あくまで推計値。痙縮はまだまだ患者側、医師側ともに啓発が不十分なため、「後遺症だから仕方がない」となりがちだ。治療を行っていない潜在的な患者がたくさんいると思われる。

―どんな治療を。

まずは運動機能を回復し拘縮にならないようにするリハビリテーションや、筋肉が硬くならないようにする内服薬から。神経や筋肉の過剰な働きを抑え、副作用の出ない範囲で量を調整する。ほかに内科的治療としては、薬を神経に注射するブロック療法、ボツリヌス毒素を筋肉に注射するボツリヌス療法もある。

―ボツリヌスというと、食中毒の原因となるボツリヌス菌のイメージ。

確かにそうだが、ボツリヌス菌そのものを注射するわけではないので、菌に感染することはない。ボツリヌス毒素には運動神経に働いて、筋肉の緊張をやわらげる作用があり、おそらく痙縮で最も実施されている治療法だ。ただ、1回に打てる総量が保険適用で決まっているので、大きい筋肉は不得意ではある。

―外科的治療はどんなことを。

直接筋肉や腱を切って痙縮を和らげる整形外科的な手術のほか、ハイブリッドな形のITB（バクロフェン髄注）療法というのもある。ITB療法は、薬の入ったポンプとカテーテルを体内に埋め込み、カテーテルを通じて脊髄付近に直接薬を投与する方法だ。手術なので感染などのリスクはあるが、薬の投与量を調整できるため、強い痙縮への対応が可能で、広範囲での効果も期待できる。当院は中西讃で唯一、ITB療法を取り入れている。

―治療で痙縮は治るものなのか。

基本的には対症療法で、元に戻るわけではなく、進行を止める、緩和するものと考えてもらいたい。ただ痙縮が弱まると、リハビリの効果が出やすくなるのは大きい。逆に治療しないでいると、関節の動きがさらに固くなる「拘縮」状態になる恐れもある。早めに治療を始めることが大切だ。

痙縮の主な症状

- 関節が固くなり、着替えや入浴に苦労する
- ひじが曲がったまま伸びず、人や物にぶつかる
- 足の筋肉がつっぱって歩きにくい

■四国こどもとおとなの医療センター脳神経外科

脳血管障害（脳梗塞、脳内出血、くも膜下出血）、脳腫瘍、頭部外傷などの診療を行っている。特に脳卒中センターに関しては、365日24時間体制で救急車を受け入れている。

所在地：善通寺市仙遊町２丁目１の１
電　話：0877（62）1000
https://shikoku-mc.hosp.go.jp/